

## 初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑥

## 最後の「ことば」

布教の旅を続けた釈迦の晩年の様子は、『大般涅槃經』において克明に描写されている。この經典も原始仏典に属しており、その内容はかなり史実に近いとされている。永眠の地となったクシナガラにたどり着く前に、釈迦はパーヴァーという地で鍛冶工のチュンダという在家信徒のマンゴー林に留まっていた。そこでチュンダは釈迦に対し、布施としてキノコの料理（一説では豚肉）を差し出した。それを食べた釈迦は激しい腹痛をおこし重篤となった。自身の死を悟り、クシナガラにたどり着いた釈迦は、旅の最後を迎える準備をしつつ、弟子たちにもその覚悟を求めるかのように穏やかに語りかけたという。

「アーナンダよ。あるいは後にお前たちはこのように思うかもしれない、『教えを説かれた師はましまさぬ、もはやわれらの師はおられないのだ』と。しかしそのように見なしてはならない。お前たちのためにわたしが説いた教えとわたしの制した戒律とが、わたしの死後にお前たちの師となるのである。」（中村訳、2015：165）

釈迦は弟子らが不放逸に修行を続けることを最後まで求めていた。その後、釈迦はアーナンダの尋ねに応じて自身の葬儀に関して詳細に指示している。

「アーナンダよ。お前たちは修行完成者の遺骨の供養（崇拜）にかかずらうな。どうかお前たちは、正しい目的のために努力せよ。正しい目的を執行せよ。正しい目的に向って怠らず、勤め、専念しておれ。アーナンダよ。王族の賢者たち、バラモンの賢者たち、資産家の賢者たちで、修行完成者（如来）に対して浄らかな信をいだいている人々がいる。かれらが、修行完成者の遺骨の崇拜をなすであろう。（中略）アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体を、新しい布で包む。新しい布で包んでから、次に打ってほごされた綿で包む。打ってほごされた綿で包んでから、次に新しい布で包む。このようなしかたで、世界を支配する帝王の遺体を五百重に包んで、それから鉄の油槽の中に入れ、他の一つの鉄槽で覆い、あらゆる香料を含む薪の堆積をつくって、世界を支配する帝王の遺体を火葬に付する。そうして四つ辻（四つの道路の合一する地点）に、世界を支配する帝王のストゥーパ（仏塔、筆者注）をつくる。アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体に対しては、このように処理するのである。

アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体を処理するのと同じように、修行完成者の遺体を処理すべきである。四つ辻に、修行完成者のストゥーパをつくるべきである。誰であろうと、そこに花輪または香料または顔料をささげて礼拝し、また心を浄らかにして信ずる人々には、長いあいだ利益と幸せが起るであろう。」（中村訳、2015：140-142）

バラモンが火の儀礼を中心とする祭式中心主義を説き、それに対して釈迦は正しい行為と瞑想という実践主義を説いたので、弟子らには葬儀などの祭式に関わることを許さなかったと考えられる。上述の事細かな儀礼の指示にはいささか誇張もみられるが、遺体を新たな布で包み火葬することは現代のインドやネパールにおいても行われており、それほど特別なことではない。いずれにしても釈迦の指示に近い形で葬儀が行われたと考えられる。

出家者が葬儀などの一切の祭式に関与しない点は、初期仏教の伝

統と教えを忠実に守っている上座部において現代に至るまで受け継がれており、大乘仏教における葬送儀礼と異なっている点が注目される。

マッラ族の在家信徒らによって釈迦の亡骸は茶毘に付され、遺骨はリッチャヴィやヴァイシャリー、シャッキヤなど八つの種族に分骨されてそれぞれ塚に埋葬された。

2500年余りの時を経て、1898年北インド、ネパールとの国境近くのピプラハワでイギリス人考古学者ペツペが、ある古墳の発掘調査の際に蠟石壺を発見した。その壺の中には人骨と副葬品が収められており、外側上部には紀元前3世紀ごろのアショーク王の石柱碑文に近い特徴を示した言語と文字で碑文が刻まれていた。そこには「聖なるブツダのこの遺骨容器は釈迦族の兄弟姉妹と妻子が奉祀する」（筆者訳）とあった。さらに1971年にインド人考古学者シュリバスタブによって、同じ場所のより古い地層の発掘調査が行われ、新たに骨壺が発見された。ペツペ発掘の蠟石壺の碑文年代と釈迦の時代には隔たりがあり、碑文の翻訳と解釈にも研究者によって相違がみられ、どれが釈迦の遺骨なのか真偽を確定するには至っていない。いずれにせよ、それらは『大般涅槃經』の記述を裏付けるもので、史料価値も高い。カニシカ王やアショーク王など、仏教を保護した権力者の年代と発掘されたものの年代比較を手掛かりに、権力者による改葬の可能性も含めてこれまでの研究成果を再検討する必要があると思われる。

さて、分骨の後、埋葬された塚は次第に人々の崇拜対象となり、そこに仏塔が建立されるようになった。その結果、仏塔に対する崇拜形式が各地にひろまり、在家信徒の信仰活動の中核をなすようになった。そして遺骨の有無に関わらず、仏塔を建立し崇拜することで功徳を積む信仰が次第に芽生えていった。さらに、建立された仏塔を維持管理する人々が現れると、彼らは出家在家を問わず新たな宗教運動の嚮導者となった。釈迦の「ことば」は新しい仏教として次第に興隆し、伝統的な上座部仏教にはない教えが大乘仏教として展開していくことになった。

特にこの大乘仏教は紀元2世紀ごろから北インドからガンダーラ地方にひろまり、シルクロードを経て西域各地から東アジアに至った。その過程で釈迦の「ことば」は思想的変容を経た後、様々な經典として生まれかわり、諸言語へ翻訳されることとなった。

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい』と。」（中村訳、2015：168）

この言葉を最後に釈迦はこの世を去った。出家者としての彼の人生は、旅に始まり旅に終わることとなった。「すべてのものは生じては滅び、それが静まる状態こそが涅槃の境地である」という彼の教えが、臨終に際する最後の言葉に収斂されている。

釈迦という一人の出家者の旅はクシナガラの地で終わりを告げた。しかし彼が残した数々の言葉は、後に「仏教」として変容しアジア各地に伝播した。「受容と変容」の新たな旅をはじめた彼の「ことば」は、次第に多くの人々の心のよりどころとなっていく。次回からはその過程に注目し、大乘仏典の翻訳に焦点を当てていくことにする。

[引用文献]

中村元訳『ブツダ最後の旅 大パリニッバーナ經』岩波書店、2015年 第49刷。